

夏は川で魚とり 淡水魚を見わける

兵庫県には真水にだけ住んでいる淡水魚が47種、アユなど川と海とを行き来するものが28種、合計75種の淡水魚が住んでいます。加えて外国からやってきた淡水魚も22種確認されています。

たった100種ならずの淡水魚とはいえ区別するのはなかなか骨が折れます。まずどこの川でも見つかりそうなハヤから始めてみましょう。ハヤとは川で泳いでいる細長い魚の総称で、特定の種をさしているものではありません。

まずハヤの仲間のヌママツ。いったい何だ！聞いたこともない。それもそのはず、ヌママツという名は2003年に細谷博士によって、カワムツから新種として分けられ提案された新たな名です。カワムツには、みなさんもきっと出会ったことがあるはずです。川の上中下流にかけて広く住んでいて、カワムツという和名を知らなくても、ハヤ、ハエ、ムツ、モトと呼ばれるこの魚と出会ったことがあるに違いありません。卵を生む初夏に雄の体が赤く染まるので、丹波地方ではアカモトと呼ばれています。

カワムツが初めて世界に紹介されたのは1846年、シーボルトらによる「日本動物誌」でした。このとき実はカワムツは二種に峻別されて記されていたのです。しかしその後日本とアメリカの魚類学の先生によって1913年にこの二種は同じ種の変異に過ぎないと判断されて一種にまとめられ、その後一世紀近くカワムツ一種だと思いついてきたのです。ところが、最近になって「違いのわかる」人たちが、どうも違う種が含まれているということに気づき始め、DNA分析の結果別種と判明し、カワムツとは別にヌママツという名があてられました。図1・2に示すように兵庫県にもカワムツとヌママツが広く住んでいます。生きている時、ヌママツの胸・腹ビレの外側が赤いことで両者は容易に区別できます。ヌママツは、日本海に流れる川からは見つからないようです。カワムツとヌママツに、ウロコが大きく口の先が赤いオイカワ（図3）を加えた3種がオイカワ属に含まれ、オイカワ属を普通ハヤ・ハエ・ハヨと総称しています。

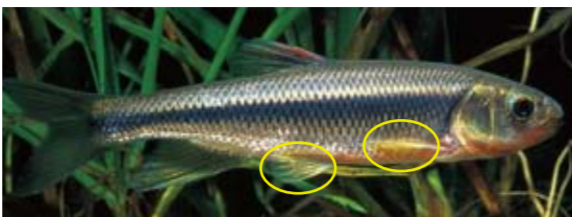
オイカワ属が確実に区別できるようになったところで、タカハヤ（図4）とアブラハヤ（図5）に進みましょう。この二種はウロコが細かく茶色でぬるっとしているのが、銀色のオイカワ属とは容易に区別できますが、二種の判別は極めて難しいです。タカハヤ尾ビレの付け根（尾柄）がやや太く、アブラハヤの体側の縦縞がよりクリアで腹側の斑点がはっきりしないといった外見で区別できますが、生きている二種を並べてみないとなかなか確信が持てません。ただアブラハヤは、兵庫県では限られた場所にしか住んでいません。住んでいる川の景観に関しては、タカハヤはアマゴやヤマメのいるような岩のごろごろした溪流の上流に住み、カワムツはそれより下流の同じように岩っぽい溪流に住んでいます。一方アブラハヤとヌママツは、岩っぽい溪流よりは、水温が低くあまり岩が多くない砂や泥底の水路のような場所を好む傾向がありますが、きっちと住み分けているわけではなさそうです。兵庫県で最も普通に見られる5種のイメージを頭に焼き付けて、夏休みには川にくり出しましょう。

田中哲夫（自然・環境マネジメント研究部）

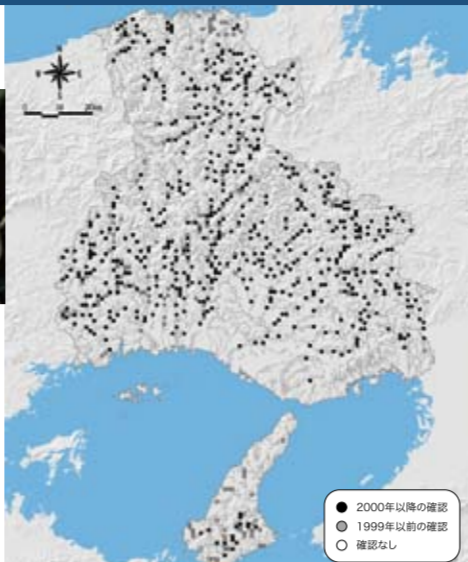
その他の淡水魚の情報は、人と自然の博物館 自然環境モノグラフ4 「兵庫県の淡水魚」（<http://hitohaku.jp/publications/book.html#mono4>）を、淡水魚に関する講座は（<http://hitohaku.jp/education/10syousai/D01.html>）をご覧ください。

撮影 タカハヤ：河田航路 カワムツ・ヌママツ・オイカワ・アブラハヤ：増田 修

カワムツ 図1



体長15cm。河川の中・下流域の岩のある流れのおだやかな場所を好む。雑食で主に岸から落ちてきた昆虫を食べる。ヌママツとは、胸ビレや腹ビレの前縁が黄色で、吻が丸く目が大きいこと、ウロコが粗いことで区別できる。



ヌママツ 図2



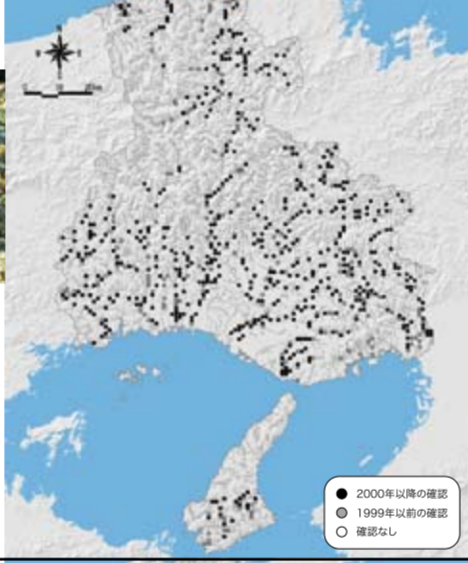
体長15cm。湖や池沼、河川の流れの緩やかな所を好む。雑食。カワムツとは、胸ビレと腹ビレの前縁が赤いこと、吻がとがり目が小さいこと、側線鱗数が多いことで区別できる。



オイカワ 図3



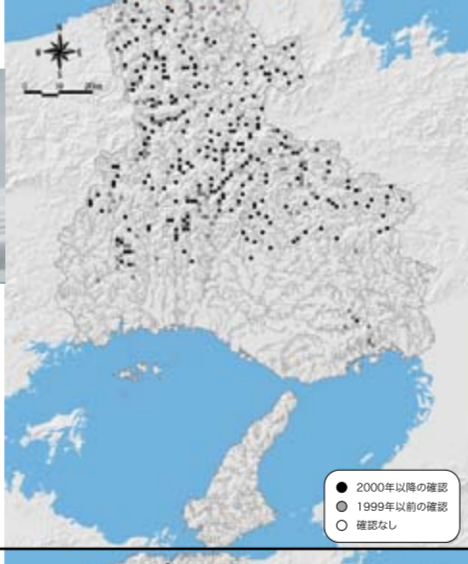
体長13cm。河川の中・下流域や湖沼にすむ。藻類にかたよった雑食。背側は青みを帯びた淡褐色。体側のやや下方を中心に赤みを帯びた7~10個の小さな黄斑が並ぶ。産卵期のオスは鮮やかな赤や緑の派手な婚姻色が現れる。



タカハヤ 図4



体長8cm。上流の流れのある大きな木の下や石の横に群がってすむことが多い。全体的に茶色でぬめりがあり、体側に小さい斑点がたくさんある。



アブラハヤ 図5



体長13cm。水が冷たく、岩がごろごろしていない川にいる。体色は薄い黄褐色またはやや緑色を帯びた灰褐色。鱗は小さく体表は滑らかで、黒っぽい斑点は体側中央に集まっています、腹側には特に少ない。雑食。



兵庫県立 人と自然の博物館
hitohaku news paper

人との応援情報誌

ハーモニ-69号
22枚 ②-001A3

ひとほく新聞

TEL:079-559-2001（ひとほくの代表番号です）
TEL:079-559-2002（学校や団体のご利用の方はこちらにおかけください）
TEL:079-559-2003（セミナーやイベントなどのお問い合わせ先です）



〒669-1546
兵庫県三田市弥生が丘6丁目
兵庫県立人と自然の博物館
(兵庫県立大学 自然・環境科学研究所)

<http://hitohaku.jp>

展示特別企画

7/17~12/26開催!

ひょうごの生物多様性 —瀬戸内海 V S 日本海—

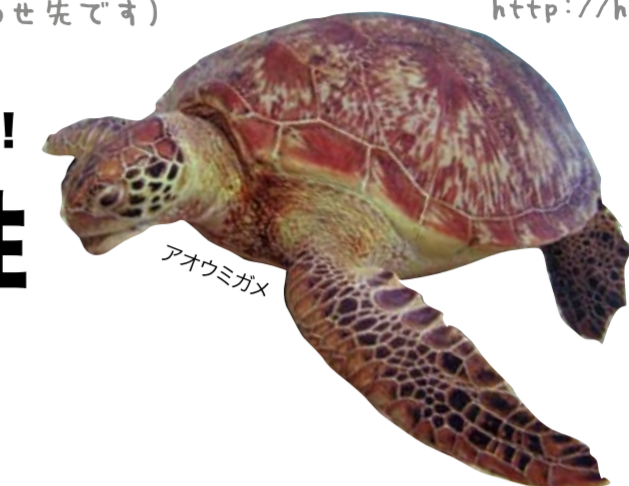
タコ(チリメンモンスターの一種)

二つの海に面している兵庫県。その生物相は瀬戸内海側地域と日本海側地域の間で大きく異なります。特に、海域の生物相の違いは顕著です。このことは兵庫県の生物多様性の大きな特徴と言えます。人間生活は生物多様性によって支えられているため、生物相の違いは生業や文化などの違いをもたらします。例えば、瀬戸内海ではイカナゴ漁が盛んに行われていますが、日本海ではこのようなことはありません。しかし、ズワイガニ漁やホタルイカ漁、ハタハタ漁はこの逆で、瀬戸内海ではまったく行われていません。こうした例は他にもたくさん認められます。そこで、今回の特別企画では、兵庫県の生物多様性、特に海域の生物多様性をメインテーマとし、瀬戸内海と日本海それぞれを特徴づける生物、環境、生業、文化、まちなみなどを詳しく紹介することにしました。

生物多様性ということで、全体をとおして様々な生物を取り上げますが、単にその分布や生態の違いを紹介するだけでなく、瀬戸内海と日本海の生物相の違いをもたらししている要因や違いが生じている仕組みについてもわかりやすく解説します。また、陸域の生物多様性の特徴をあわせて知っていただくために、里地里山の生物相の違いに関する展示も行います。

具体的な例として、以下にいくつかの展示物を紹介します。展示物の多くは生き物の標本ですが、その中で最も大きなものは、2001年に淡路島の沖合で漁網にかかり、その後死亡したナガスクジラの全身骨格標本です。陸揚げされた時の全長は9.6m、体重は約6トンでした。解体後に色々な処理を行い、骨だけの状態となるまでに2年を要しました。全長がとても長いので、これまでは頭部の標本しか展示できませんでした。ですから、全身骨格標本の展示は今回が初めてということになります。

これ以外の大物としてはオサガメ（長亀）の剥製があげられます。ウミガメの一種であるオサガメはカメ目の最大種で、体がとても大き



くなります（このことが名前の由来）。背面は滑らかな革質の皮膚で覆われており、アオウミガメやアカウミガメのような骨性の甲羅の成分は著しく退行しています。今回は、日本に存在する最大級の剥製を三重県紀宝町ウミガメ公園からお借りしました。全長は2mあまりです。このような剥製はなかなかお目にかかれませんが、一見の価値あります。

大物ではありませんが、ちまたで大人気のチリメンモンスターも展示します。チリメンモンスターと（略称チリモン）は、チリメンジャコに混じっているシラス以外の小さな生き物のことを言います。チリモンの種類はとても多く、魚はもちろんのこと、タコやイカ、エビ、タツノオトシゴ、ヒトデなどの仲間もみられます。驚くべきチリモンの多様性をどうぞお楽しみください。展示期間中にチリモンさぎしのイベントも行いますので、是非ご参加ください。

石田弘明（自然・環境再生研究部）



陸揚げ時のナガスクジラ



チリメンモンスター



クチキレウキガイ (チリメンモンスターの一種)



イソギンポ (チリメンモンスターの一種)

ひとほくコラム

ミツバチと暮らして42年

東京農業大学でセイヨウミツバチに出会ったのは、2年生のときで、昆虫学研究室の先輩がつくったミツバチ研究会に誘われるまま入会し、それからもう42年…。そのうち濃密にミツバチを研究したのは北海道大学の大学院時代です。「1個体追跡法」でミツバチ1個体の行動すべてを追い求めて、「ハチ小屋」と呼ばれていた木造の研究室に住み込み、24時間ミツバチと暮らしていました。札幌でのハチとの楽しい生活は11年続きました。

さて、ハチといえば、「刺す」ことが第一に頭に浮かび、次に「刺される」と死ぬかもしれないという恐怖がつきあがってきます。しかし、ハチに刺されて死ぬ人はごくわずかです。ハチが刺すのは、自分たちの巣がダメージを受けそうな時、巣を守るためですから、守るべき巣が近くになれば、ハチはまったくこわくはありません。

42年ミツバチと暮らしている、いろいろなハチに出会う機会もありました。その中で、普通の人のハチへの反応がいかに過剰なものであるかを強く感じました。ハチに刺されることは刺された本人がハチにとって何か悪いことをした結果なのですが、それをいかにわかってもらうかに、セミナー等で日々腐心しています。

大谷 剛
（兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員）